



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	”軽度” 発達障害を持つ子どもたちの支援 その4 : 土曜教室と学校教育における特別支援教育
Author(s)	山下, 公司
Citation	子ども発達臨床研究, 2, 53-56
Issue Date	2008-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32449
Type	departmental bulletin paper
File Information	YAMASITA.pdf



土曜教室と学校教育における特別支援教育

山下 公司*

Saturday Class and School Education in Special Support Education

Koji YAMASHITA

要 旨

本小論は、現職の特別支援学級の教員である筆者が、土曜教室において学んだ子どもたち一人ひとりに対して行われるミーティングの進め方、アセスメントや事例の検討についての考え方について、教育現場への展開について検討した。また、土曜教室での自らの学びや勤務校での特別支援教育についての現状についての考えをまとめた。土曜教室の関わりを通して見えてきた、保護者との連携、スタッフ同士の話し合い、そして子どもたちと共に困難さに対して全員で向き合う姿勢について、勤務校で生かし実践を行っている。

キーワード：特別支援学級、ミーティング、話し合い、保護者との連携

筆者は現職の特別支援学級の教員である。本小論では、土曜教室における学びを通して、学校教育における特別支援教育について考えてみたい。

紹介する。

1. 現職教員が土曜教室で学ぶ意義 ～学びの場を求めて～

本項では、学生たちが中心スタッフとして運営されている土曜教室で学ぶ意義について、現職教員の立場から考えたものである。筆者は、土曜教室の中で多くの学びを得ていると実感しているが、今回は4点に絞り学校教育の実践を通して紹

(1) ミーティングの意義

土曜教室で行われている事前ミーティングでは、個別の指導計画をもとにした子どもたちのその日に行われる学習課題についての吟味がなされる。その IEP 作成の段階で、子どもたちの特性やいま抱えている困難さについて話し合いがなされ、ある程度の共通理解がもたれている。またミーティングにおいて学習課題を目の前にすることで、子どもたちの実態が担当児童以外についても、共通理解が図られる。さらに、さまざまな人によ

*札幌市立藤野小学校 教諭

る、さまざまな視点で話し合いが行われるので、子どもたちの実態が見え、結果的に多角的な見方ができる。

筆者はこれらのミーティングの様式を本校の学年研修に生かした。本校の特別支援学級では、主として生活年齢に応じたグループに分けて指導している。各グループでの個別指導の時間を設定し指導を行っているので、ある程度の共通理解はなされるものの、それぞれのグループがどういった課題でどういった指導が行われているのかは詳しくはわからなかった。そこで、学年研修の時間に、それぞれのグループで行われている指導について検討する場面を設定することとした。そうすることで、担任以外も子どもの実態がより把握でき、子どものさらなる実態把握ができた。「この人でなければ」というような限定的な支援から、「この人でも」という支援に広がりを持つことができるようになった。

(2) 個別課題の検討

土曜教室では、子どもの学習課題を考える際に、多くの時間をかける。苦手を克服する課題であったり、長所を伸ばそうとする課題であったり、子どもの持つ困難さが見えてくる課題であったりする。子どもたちの実態を見据えた課題であることは間違いないが、常に前回の学習場面での様子や反応などを参考にする。また、学習課題を考える際に、予想される子どもの反応まで検討する。子どもの持つ困難さが見えてくるような課題でもあるので、次回以降の課題も必然的に見えてくる。課題を作成し、実施し、子どもの困難さが見えてきて、再度課題を検討する。検討した課題をまた実施していく。それを繰り返していくことで、さらなる実態把握を進めながら、子どもの困難さに直接的に働きかけることができるのである。

学習課題を練るこれらの取り組みを本校の特別支援学級の実践でも生かした。具体的には、個別の指導場面の確保である。今までは個別の指導場面の重要性を感じていながら、日々の課題に追われることが多かったが、時間割の中でも「グルー

プ」という小集団の時間を設定し、その中で柔軟に個別指導の時間を取ることができるようにした。現在では、1年生で週23時間中6時間は「グループ」の時間としている。その中で、同じようなサイクルで課題に取り組むようにしている。担任数など体制的な厳しさもあるが、学習面での子どもの育ちを実感することができている。

(3) “通常学校”における特別支援教育に対する意識

今回は外部機関との連携について学校内でのアンケートを実施し、本校の教員が特別支援教育に対して、どのような意識を持っているか調査した。

発達障害に関する知識などが必要であると実感しているものの、なかなかそういった場が少なく、どうしたらよいかわからないというのが実態である。また、どう子どもたちの学習面での困難さに対応して良いか、外部機関からアドバイスをもらいたいと思っているということもわかった。

筆者は、学校内で特別支援教育コーディネーターをしているため、外部との連携を図る機会が今後も増えてくることが予想される。特別支援教育を推進していく上で要となる存在であるため、外部機関との連携がありうるか模索し、校内委員会を推進していく必要がある(鋒山、2004)。学校からすると外部機関である土曜教室に関わっているので、外部機関からの学校という視点を持つことは重要であると考ええる。

(4) 専門性を高める場を求めて

通常の学校教員は、子どもたちと直接的に関わり、“軽度発達障害”に関する専門性を高める場が限られているのが現状である。そんな中で土曜教室は、数少ない子どもとかわり合いながら専門性を高められる場である。文献などで発達障害に対する知識を得ることはできるが、土曜教室で学ぶことのできる生の経験は大きい。また、学校という場以外での子どもの様子や保護者の話を聞くことができるということも大きな学びである。保護者が感じる学校というものも聞くことができ

て、大きな学びとなっている。

2. 土曜教室から得られた支援の在り方 —— 土曜教室での学びを学校教育に生かす ——

本項では現職教員の立場から、土曜教室での自らの学びや勤務校での特別支援教育についての現状についての考えをまとめた。

(1) 自らの学びと土曜教室

土曜教室では、学校での学習場面などの様子などだけではなく、保護者からの情報などで、家庭生活での様子も聞く。子どもの困難さが生活全般でも出てくる可能性があり、対人関係の困難さなどは顕著に出てくることがわかった。学習面だけではなく、生活面での困難さを知ることにより、子どもの困難さの根本に迫ることができるのではないだろうか。

保護者の思いに寄り添うということも重要な教育活動の一つである。だが、なかなか実践していくことが難しいのが現状である。この課題に取り組むことが大事であるという「子どものため」という思いを押し付けている可能性があるということなどを常に考えていく必要がある。一緒に担当しているスタッフから「お母さんに対して、お母さんが今感じている不安と行おうとしている課題とがどう結びつくのかを説明する必要がある」と指摘を受けた。家庭と連携し、子どもの困難さに迫っていくためにも、インフォームドコンセント（十分な説明と同意）と、アカウンタビリティ（説明責任）の大切さ（笹森、2005）を実感した。

(2) 本校での特別支援教育の実際と困惑

土曜教室では、事前・事後のミーティングを大事にしている。本校でも話し合うことを大事にしたいと考え、今年度からケース会議を充実させることにした。4月に全校での児童理解研修会、前期後期の低・中・高学年それぞれ各ブロックでのケース会議、年度末の全校での児童理解研修会を持つこととした。個別のケースについてはそのつ

ど実施している。

子どもに対し、様々な立場の人間がかかわること、子どもの実態把握が深まることを土曜教室の学びで得た。学校に投影させると、さまざまな子どもの表情をさまざまな先生が見ているので、共通した実態把握や情報の共有を図ることが重要である。また、コーディネーターに相談するだけではなく「学びの支援委員会（校内委員会）」の運営をすることも重要である。土曜教室では、どの学生の意見も尊重される。そこから見えてくることも多い。どの先生の意見も尊重される、一方的な相談・助言という形ではないケース会議の持ち方が重要になってくる。

実態把握をした上で、個別の指導が必要になってくるのではと通常学級担任も、コーディネーターも実感していても、時間的な制約や周囲の児童・教員の協力がなくては難しい。現状においては、通級指導学級がないという状況があり、また特別支援学級の活用についても難しい状況がある。現在、支援している児童は、保護者も了解した上で、放課後支援を実施している。学校のシステム自体を変えていく必要がある。

また、教員の意識の格差も解決すべき重要な問題である。特別支援教育というものが必ずしも浸透していない現状があり、子どもはなんらかの困難を抱えているものの、ケース会議にあらがないことも多い。全校体制で子どもの困難さに取り組んでいく必要がある。引き継ぎなどの問題も全校体制で取り組むことで解決していかなければならない。

(3) 土曜教室で学ぶ意義

土曜教室では、子どもに学び、保護者に学び、スタッフに学ぶことができた。

土曜教室に通う子どもたちは、何かしらの困難さを抱えている。その困難さに対応していつているが、子どもの反応は見事である。子どもの変化や成長から、土曜教室で行っている課題や活動の重要さがわかる。子どもから学んでいることは大変多い。

土曜教室で大事にしていることは、スタッフみんなと子どもと一緒に抱えている困難さに対応しているということではないだろうか。いわゆる共同戦線というものだ。本校に欠けているものは、これかもしれない。

土曜教室では、毎回保護者から話を聞く場面がある。そこで、課題についての説明などがなされる。ここでも共同戦線を張るのである。保護者の学校の見方や子どもの見方普段のご苦労されているお話など保護者から学ぶものが大変多い。

スタッフ集団は、子どもとともに困難さに向き合い、日々話し合いを進めている。スタッフは子どもの幸せだけを願い、向くべき方向がみな同じである。また、さまざまな個性のある人たちであるが、その個性を最大限生かしている。個性を生

かす集団のいい実践例でもあるかもしれない。また、スタッフの子どもの見立ては非常に勉強になる。日々、新たな視点を得ることができている。

発達障害に対する専門性とは何なのか。未だ答えは出ない。が、土曜教室での子ども・保護者とスタッフたちとの関係にその答えがあるかもしれない。と、筆者は考える。

引用文献

- 笹森洋樹 (2005) 学校全体で支援体制をつくる ― 教育委員会の立場から ―, LD 研究, 第 14 巻, 49-52.
- 鋒山智子 (2004) 特別支援教育コーディネーターの役割 ― 京都府におけるコーディネーター養成研修 ―, LD 研究, 第 13 巻, 217-223.